

学校文法を超えて (1)

— 日本語との比較から見た英語 —

平 出 昌 嗣

千葉大学・教育学部

Beyond School Grammar

— English in comparison with Japanese —

HIRAIDE Shoji

Faculty of Education, Chiba University, Japan

キーワード：言語 (Language) 日本語 (Japanese) 英語 (English) 語順 (Word Order)

文法とは言語を構成する語・句・文などの形態や機能に関する法則のことである。しかしその法則は、ただ一つ、絶対的なものがあるわけではなく、その言語をどう見、どう分析するかによって内容はおのずと異なってくる。歴史の流れの中で言語を変化として捉えたり、広く文化全般の中で捉えたりする見方がある一方で、また今使われている言語そのものに焦点を当て、それを理論化し、一つの規範として体系化しようとする見方もある。学校教育で採用され、実用目的で教えられているものはこのタイプになる。日本語では文節に基づく橋本文法、英語では5文型に基づくOnionsの文法などがその学校文法の土台になっている。それは社会で使用するのに正しいと判断される一つの標準的な型を提供するから、理論的で、秩序だっており、分かりやすく、学習しやすい。だがその反面、言語の背後にある歴史や発想法や文化を対象としなかったり、理論から外れた現実の言語現象を考慮しなかったりするため、ともすると形式的で表面的なものになる。本研究の目的は、互いにまったく異なる言語である英語と日本語の比較を土台に、さらにそこに歴史や文化という要素を取り入れながら、学校文法に捕らわれない広い視野から言語の仕組みを捉えることにある。本論では特に、言語とは何かという問題、そして語順の問題を扱う。

第1章 言語とは

言葉とは何か。それは人間とは何かという問いと同じくらい難しい問題である。人間は言葉なくしては生きられない。人は毎日、言葉で人と交わり、言葉でさまざまなことを知り、言葉で考え、言葉で自分の生活を組み立てていく。言葉は人間にとって、空気や水と同じくらい、生きるのに不可欠なものである。だから、もし人間から言葉を取り去ってしまったら、人とは交われず、現実を知ることができず、考えることもできず、自分の生活を組み立てることもできなくなる。つまり人は人間ではなく、うなるだけ、ほえるだけの動物と同じ存在にまで退化してってしまう。

ふだん何気なく使っている言葉も、人類の進化と係わ

りを持つ。と言うより、言葉こそ人類を進化させた力である。現在この世に生きている人類はホモ・サピエンス (賢い人の意) と言い、西洋人、日本人を含め、またコーカソイド (白色人種)、ネグロイド (黒色人種)、モンゴロイド (黄色人種) を含めて、人間であればすべてこの種に属するのだと言う。何万年も前には、ネアンデルタール人やホモ・エレクトス (直立した人の意) など、同じヒト科ヒト属に入るほかの種もいたが、すべて絶滅して地上から消えていった。しかしホモ・サピエンスはほかの種よりも脳が発達し、知的能力、言語能力に優れていたから、大自然の生存競争に生き残ることができた。

人類の歴史を少したどっておけば、ヒト属は、約二百万年前、アフリカで、直立二足歩行や石器の使用により、霊長類の中から進化し、猿人、原人、旧人、新人と発達してきた。新人であるホモ・サピエンスは、二十五万年前に現れ、長く東アフリカに住んでいたが、五万年から七万年前に、突然変異なのか、その文化が急速に発展し、移動するだけの能力を得て東アフリカから出、中東を経て、ヨーロッパやアジアなどに広がっていった。そこにはすでに、ヨーロッパにはネアンデルタール人、アジアにはホモ・エレクトスといった先住民がいたが、ホモ・サピエンスは高度な言語能力によって彼らを駆逐し、入れ替わって、どんどん勢力を広げ、アメリカやオーストラリアも含め、世界の各地で新しい文化、新しい文明を築くようになった。日本にも氷河時代に、海面が低下し、アジア大陸と地続きとなっていた時にやって来、氷河期が終わって海面が上がり、日本が大陸から隔てられると、縄文人として、そこで独自の文化を築くようになる。

この新人類ホモ・サピエンスが生き残ることができた能力は、直立二足歩行、道具の使用、火の使用以上に、言葉の使用がある。彼らはネアンデルタール人よりも言語能力が高かったおかげで、言葉を使った状況把握や計画行動などができ、また言葉による知識の伝授によって優れた土器や武器を作ることができた。つまり言葉こそ彼らの発展の本質であった。脳でこの言語をつかさどる部分は言語野 (言語中枢) と言い、人類はこの部分が発達している。もし脳腫瘍や外傷でこの部分を損傷すると失語症になり、言葉を理解したり話したりすることがで

きなくなる。重症の場合、思考そのものができなくなり、動物と同じ本能と感情だけの存在となってしまう。つまり、人間は言葉があるおかげで考えることができる。だから、言葉は人間を人間らしくしている本質的な力と言っている。

ではその言葉はどのように発展したのだろうか。生き物はすべて、たえず流れ動く現象界に投げ出されており、そこに依存し、そこに順応して、生まれ持った本能の力で生きていく。その生き方は自然環境に支配された受動的なものである。しかし人間は、考える力を得ることで、その流れ動く現象界を固定し、分解して、取り出した一つ一つに言葉を与え、扱いやすいものに変えていった。目に見えるものなら、木、川、空、鳥、花といったように、状態なら、暑い、寒い、怖い、うれしいといったように、動作であれば、歩く、眠る、走る、食べるといったように、現象界は最小の要素に分解され、言語化されていった。こうして彼らは、彼らが置かれた、感覚を通して知る物理的世界のほかに、言葉によって構築される理性的世界を得ることができるようになった。彼らは現実の事物を言葉に写し取るだけではなく、さらには時間や方向や数を表す言葉を考案し、ついには文字を記録する文字を発明することで、現象界を確実に言葉の網の中に捉えていった。それは自然に依存するのではなく、逆に理性で自然を捉え、支配していこうとする積極的な生き方である。そのことにより、人類は自然から独立し、言葉によって現実を把握したり、分析したり、想像したり、計画を立てたりすることができるようになった。さらには、目に見える世界だけではなく、目に見えない世界までイメージ化し、言語化して、認識できるものに変えていく。こうして神や精霊や靈魂が生み出され、宗教が誕生し、自然界の諸現象は神々の物語として表現される。それは文明が進むと、自然の背後に物理的法則を見出す科学的精神になる。こうして言葉を手段として、人間独自の文化が豊かに花開いていくことになる。

言葉には大きく二つの働きがある。一つは、仲間どうしのコミュニケーションの手段となることである。言葉によって意思疎通がはかれ、議論ができ、心と心がつながって、目的と秩序を持った集団行動を取ることができる。また同じ言葉を話すことが同族であることの印であり、それは血が成す以上に集団を堅固にする。古代のギリシャ・ローマ人は外国人をバーバリアンと呼んで軽蔑していたが、それは「わけの分からない言葉話す人」の意であった。従って言葉は団結心を作り出し、社会をまとめる大きな手段になる。言葉のもう一つの働きは、抽象的な思考を可能にすることである。言葉を用いることで、目の前の具体的な事物にとらわれず、そこから離れて、自由にものを考えることができる。その能力により、人間は現実を超え、現実にはない新しいものを想像することができる。進歩と創造はそこから生まれる。作り出されたものは共有され、蓄積され、蓄積されたものの中からさらに新しいものが作り出されていって、文化はどんどん大きく豊かなものになっていった。

世界各地に散った人類は移動と定着を繰り返しながら、何千年、何万年という気が遠くなるような時間の中で、それぞれの文化を築き、言語を作り出していった。文化

が違えば、考え方も違われ、それを表す言語も違う。たとえ同じ民族、同じ言語から出発したとしても、何千年、何万年という時間の流れの中で、まったく違ったものに変化し、進化していく。もっとも、どんな言語も、名詞、動詞、形容詞などと分けられる点では似ている。それが普遍的なものか、それとも新人特有の言語分類なのかは分からない。もしホモ・サピエンス以外の種が生存していたとしたら、違う分け方もあったかもしれない。しかし現実には、同じホモ・サピエンスとして、分け方が同じことで、他言語は、どんなに異なっていたとしても、理解可能なものになっている。

今、言語で分かっていることは、英語は、他のヨーロッパの言語と同様、インド・ヨーロッパ祖語から発展したということである。その祖語を話す民族は、初めは中部ヨーロッパ、あるいは黒海の北あたりにいたというのが、ヨーロッパからインドにかけての各地域に広がり、それぞれの土地に住みついて、独自の言語と文化を作り出していった。英語は、ドイツ北西部にいたアングロサクソン族の言語が元になっており、ゲルマン語派に属し、ドイツ語やオランダ語と兄弟言語になる（他に、ラテン語やフランス語などの元になるイタリック語派、ロシア語やポーランド語などの元になるバルト＝スラブ語派、バルシャ語やヒンディー語などの元となるインド＝イラン語派などがある）。一方、氷河が溶けて海面が上がり、日本列島に閉じ込められた新人（縄文人）は、そこで他からの影響はあまり受けず、一万年にわたって、独自の言語と文化を築き上げていく。縄文人がどういう言語を話していたかとか、紀元前三世紀頃に大陸から来た弥生人との融合を通して言語がどう発展したかといったことは何も分かっていない。文字がなく、記録がいつまで残っていないからである。日本語の兄弟言語が見出せないことは、日本語が突然変異を起こしたのか、あるいは日本語の元となる言葉を話していた民族は遠い昔に絶滅してしまったのかもしれない。

日本語と英語は、このように、長い時間をかけて、地球の東の端と西の端で別々に発達した言語であり、当然、大きな違いがある。ではどう違うか、簡単な例で見よう。まず人を表す言葉について。人は、英語ではmanと言う（「人」が原義。後に「男」の意にもなる）。指す対象は同じだが、言い方が違う。語源をたどっていくと、manは、諸説あるものの、mindの語源でもあるmen-、つまりthinkと係わる（ラテン語のmensは知性、思考の意）。そこには、考えるもの＝人間という発想がある。パスカルが人間を「考える葦」と言ったように、西洋人にとっては思考が人間を動物から区別する特徴になる。一方、「人」は、象形文字としては、人の立っている姿を横から見たもので、人間とは立って歩くもの、つまり直立二足歩行という発想がある。しかしこれは漢字で、ニと読み、中国人の発想になる。日本人はニではなく、ヒトとして捉えた。ヒトとは日を受けるものの意で、太陽の光を浴びて生まれたものという生命的な発想がある（ヒは、男を表すヒコ（彦・日子）、女を表すヒメ（姫・日女）のヒと同語源で、太陽の意。トは、ミナト（港・水戸）、セト（瀬戸）のトと同語源で、止・戸・門の意）。従って、それぞれの言葉には、人間をど

う見るかという各文化に固有の発想が最も簡単な形で反映されていることになる。このことは人についてばかりではなく、すべての言葉について言える。言葉は民族の心を映す鏡になっているからである。

人についてのイメージの違いは、人が作る文についてのイメージの違いにもなる。英語は理性に裏打ちされた言語であり、各語が論理的に結び付き、それ自体で独立して、客観的に理解できるものとなる。一方、日本語は命のこもった言語、つまり相手への配慮に満ちた言語であり、文は人の心を反映して、ふくらんだり、ゆがんだり、ぼやけたりする。特徴的なのは人称の省略である。

I love you with all my heart. Would you marry me?
心から愛しています。結婚してもらえませんか。

英語では誰が誰に何をしたということがすべて明示され、文はそれ自体で完結している。しかし日本語では「わたし」や「あなた」という人称代名詞は示されない。状況から容易に分かるからである。英語ではIやyouを省くと文が崩壊して意味が取れなくなってしまうが、日本語では「わたし」や「あなた」を入れると、文が長たらく形式ばったものになってしまう。

日本語では話し手と聞き手がいる場合、主語のない平叙文は、基本的には、話し手自身のことを表している。疑問文や命令文であれば、それは聞き手に向けられたものである。「疲れた」を例にとると、次の三つの文は、主語は示されなくてもすぐに補える。

疲れた。(I am tired)
疲れた？(Are you tired?)
疲れたね。(We are tired, aren't we?)

このように日本語は状況に依存して文が生み出されるが、英語は状況には依存せず、文が独立した完全な形で作られる。語り手は、日本語では状況の中に身を浸して述べるが、英語では状況の中に身を置きながらも、文作成のレベルでは、その状況から抜け出し、その外側から、自分の状況を、Iを主語にして客観的に述べることになる。つまり日本語の表現が語り手の主観的なものなら、英語の場合は客観的なものになる。

英語は外から状況を客観的に捉えようとするから、使われる単語や表現も客観的なものになる。つまり何の色づけや膨らみやぼやけもなく、一つの明確な言い方になる。しかし日本語は主観的な表現になるので、相手に応じ、状況に応じて、語り手の感情が多様な形で言葉遣いに反映してくる。He will comeという文だと、英語では三人称代名詞はheの一語だが、日本語では相手への感情がこもるから「彼」という言い方はあまりせず、「あの人」「あの方」「あいつ」「あの野郎」、あるいは名前をそのまま使って「井上」「井上さん」「井上君」、あるいは先生なら「先生」、父なら「父」などと言う。すでにその人物が誰か分かっているなら、あえて使わなくてもいい。動詞も、「来る」「いらっしゃる」「来られる」「おいでになる」「お越しになる」「お見えになる」、あるいは「参る」、あるいは「来やがる」などと言え、さらに

語尾をつけて、「来るよ」「来るぜ」「いらっしゃるわ」「いらっしゃるの」とも言える。以上の言い方を組み合わせれば、その表現は数え切れないくらいになってしまう。英語は外から客観的に表現する、日本語は内から主観的に表現するという話し方の違いが、このような表現の一律性と多様性となっている。

状況を外から客観的に見るという英語の態度は、自分のことであっても必ずIを主語に立てるというだけではなく、ほかの重要な表現方法を支える土台にもなる。例えば無生物主語の他動詞表現、例えばThe rain prevented me from going outという表現は、日本語にはない英語独特のものであるが、これも、無生物を擬人化して意志を持つものに見立て、「わたし」を客体と見る発想で、常に「わたし」を主体とする日本語の発想からは出てこない。日本語では「わたし」を主語にして、「雨のために(わたしは)外出できなかった」と訳すしかない。あるいは再帰代名詞を使った表現も、「わたし」を客体と見る客観的な表現方法になる。例えばI enjoyed myself very much at the party(パーティはとても楽しかった)は、文字どおりには「わたしはわたし自身を楽しませた」となるから、まるで自分が二つに分裂したような印象を与える。あるいは、She let herself be kissed, closing her eyelids briefly(彼女はまぶたを少しの間閉じて、キスされるままでいた)は、直訳すれば「彼女は自分自身をキスされるままにした」となり、彼女と彼女自身は別々の存在という印象を受ける。この発想は日本語ではおかしいが、英語では分析的なものになる(「わたし自身」といった言い方は英語のmyselfの訳語としてできたもの)。つまり魂としての自分と身体としての自分が区別される。だから次のような表現も生まれてくる。

He gave his face a serious expression.
(直訳 彼は自分の顔にまじめな表情を与えた)
(意訳 彼はまじめな顔をした)

Beware, my heart. You're getting in too deep.
Take care, my heart. This is a bit too steep. (Betty Carter, "Beware My Heart")
(気をつけて、わたしの心。深入りしすぎているわ。注意して、わたしの心。ちょっとばかり危なっかしいわ)

ここには二人の自分がいる。一人は意識主体、行動主体としての自分、もう一人はその自分が働かせる身体としての自分、あるいは心などの自分の一部である。

日本語が主語などを省くことは、発声上の理由もある。I love youを直訳し、「わたしはあなたを愛しています」とした場合、文としては長ったらしい印象を与える。実際、英語では3語(3音節)なのに対し、日本語では15字(15音節)にもなる。話す場合は、「好きだ」とか「愛してる」とか、一息で簡潔に言える方がよく、あまり長いと息継ぎをしなければいけなくなる。だから、必要な言葉だけを伝え、後は想像にゆだねる。それが日本語の話し方としてある。これは文芸作品に結晶する。「春はあけぼの」は、体言止めにすることで余韻が出る(英訳はIn spring it is the dawn that

is most beautiful. By Ivan Morris)。「古池や 蛙飛びこむ 水の音」は、静かという言葉がなくても、与えられた言葉から静けさが波紋のように広がっていく(説明的な訳として、old pond/a frog leaps in --/a moment after, silence. By Ross Figgins; Breaking the silence/Of an ancient pond./A frog jumped into water --/A deep resonance. By Nobuyuki Yuasa)。日本語では、言葉とは言い表そうとする事柄のすべてではなく、「ことの端」(「言葉」の語源)であり、ことの一部にすぎないが、しかしその暗示力は強く、言葉に述べられないことも感じ取ることができる。英語の場合は、言葉はすべてであり、言葉で表現しないものは存在しないものと同じである。だから、いかに的確な言葉を見つけ出すかが重要になる。

この言葉のあり方は動物と植物のあり方にも喩えられよう。英語は動物であり、頭部、胴体、脚部を持つ羊や牛のように、主語、動詞、目的語をすべて備え、構造がしっかりとっていて、かつその形が常にはっきりと見えている。一方、日本語は植物であり、根、葉と茎、花(実)という構造を持つが、根は土壌に隠れて見えず、花や実は時期が来なければ現れない。花(実)はいわば言いたい核心部分、つまり本音であるが、それはあからさまに言うべきものではない。「疲れたね」とは「休もう」という本音を暗示するが、その本音の部分は口にはしないで、相手の想像力に任せ、相手の心にこちらの本心が花開くのを待つ。また根がある土壌は共通の場であって、「わたし」や「あなた」のように自明なことなので、強調したい場合を除けば、あえて表に出すことはない。

こうした違いには、西欧が牧畜文化、日本が稲作文化ということも関係しているように思われる。遠い昔から家畜を解体するのを習慣としてきた西欧人にとって、動物の体の構造は、何かを組み立てる際のモデルになる。アリストテレスは悲劇のプロットについて、「生きている有機体(生物体)のように」、初めと真ん中と終わりを持ち、統一されていることを理想とした(『詩学』23章)。文についても同様であり、主語+動詞+目的語というように、各部分がきちんとそろい、構文として完全であることが重要になる。一方、米作りを習慣としてきた日本人にとってのモデルは稲である。稲は、日を浴びて生まれ出るすべての生命の象徴である。一つの文もまた、土壌に根を張り、生長し、最後に花が咲き、あるいは穂が実って完成する。土壌とは、話し手と聞き手が共有する状況のことである。言葉はそこから、葉のように生み出され、伸び、ふくらんでいく。言葉はこの端、そして言の葉であり、「人の心を種として」(紀貫之『古今和歌集』仮名序)葉を茂らせ、花や実を導く、あるいは暗示する。比較すれば、日本語の文生成の原理は、実る、生まれるということであり、暗示的で不完全になりがちであるが、英語の文生成の原理は、作る、組み立てるということであり、明示的で完全なものになる。

第2章 語 順 — 積木型と袋型 —

言いたいことを伝えるのに、どういう順番でそれを伝えていくのか。重要なことを先に伝え、後で細かいこと

を付け加えるのか、それとも細かいことを述べた後で、結論として重要なことを言うのか。そのやり方は、人により、また状況により異なる。しかし言語の場合、この提示の仕方は文法的にはっきりと決まっている。重要なことを最初に持ってきて早く相手に伝えようとするのが英語であり、重要な語を最後に持ってきて、それで全体を締めくくろうとするのが日本語になる。

英語では、何かを聞く時はDo you~, 否定する時はI don't~, 助動詞を使う時はI can~, 時を表す時はHe went~などのように、文の性質や方向付けを決める語を最初の方に置いて、これから述べる文が何を言おうとしているのかを早い段階で明確にする。それに対し、日本語は、「~ですか」、「~ではありません」、「~できます」、「~しました」のように、それらの語を文の最後に置く。だから日本語は最後まで聞かないと何を言いたいのかわからないことになる。命令形でも、英語はGo away from here immediately! のように文頭で分かるが、日本語では「すぐここから出ていけ」と逆になり、最後の言葉を聞かないと分からない。whenやwhatなどの疑問詞も、英語では文頭に置いて何を聞きたいのか明確にするが、日本語では、「彼は何をしたの?」のように文中に置いたり、最後に「の」や「か」などの助詞をつけて疑問の形にする(ただし会話文であれば、My what? とか、Such as what? のように文中に置くこともある)。

平叙文(つまり命令文・感嘆文・疑問文ではない叙述の文)では「誰が(何が)どうした」ということが、伝えるべき重要な事柄である。英語で一番多く使われる他動詞形を例にとると、そこには、まず主語があり、次いで動詞、次いで目的語という明確な順番がある。それが伝えるべき核の部分成し、それに付随する状況、つまり、いつ、どこで、どのように、といったことは、alwaysなどのような短くて位置の決まっている語を除き、基本的にはその後に並べられる。従って聞き手は最初の核の部分で相手の言いたいことの輪郭を知ることができ、続く副詞(句・節)等で細かなことを知り、話をふくらませていくことになる。

I played tennis with her very pleasantly in my tennis club yesterday, though I had a slight pain in the back. (背中が少し痛かったけれど、きのう、テニスクラブで彼女と楽しくテニスをした)

この文では最初のI played tennisが核の部分となり、そこに、with her, very pleasantly, in my tennis club, yesterday, though I had a slight pain in the backという五つの副詞、副詞句、副詞節が付け加えられている。形としては、まずまとまった核の部分があり、そこから修飾語句が連続して展開していく開いた構造を取る。

一方、日本語の場合、動詞は文の一番最後に来る(正しくは述語。動詞(形容詞)+助詞・助動詞で構成される。便宜上、動詞として言及する)。主語は文の最初の方に置かれるが、主語が自分である場合や容易に推測できる時は、あえて示さない。いつ、どこで、どのように、といった修飾語句は動詞の前に並べられ、文は最後の動詞をもって完結する。だから、いくつかの修飾語句を並

べた後、最後に動詞で締めくくられる閉じた構造になる。この構造では、動詞が最後に来るまで、文の輪郭さえ分らず、聞き手は宙ぶらりんの状態に置かれるから、英語のように長々と文を続けることができない。日本語では、「きのう彼女とテニスクラブでテニスをして楽しかった。背中が少し痛かったけどね」と二つの文に分けた方が理解しやすい。

目的語が二つ並ぶ場合は、I gave him a bookのように、まず人、ついで物が来る。古英語では、名詞は格変化し、その屈折語尾で「～に」「～を」という位置関係が分かった。だから日本語と同様、順番は比較的自由だったが、現代英語はその指標を失ったことで、はっきりと順位がついた。この順番を入れ替え、人を後置する場合には、I gave a book to himのように、行動の方向を示す前置詞toをつける必要が出てくる。この前置詞はもともとは名詞の屈折語尾に示されていたものだが、格変化を失ったために、前置詞として独立して出てきたものである。日本語の助詞「に」に相当する。

さらに英語では、主語＋述語の後に続ける副詞の順番もだいたい決まっている。まず様態 (with her, very pleasantly), 次いで場所 (in my tennis club), 次いで時間 (yesterday), 次いで副詞節 (though I had a slight pain) となる (例外については後述)。日本語にはこの決まりはなく、並べ方は自由であるが、だいたい英語とは逆に、時間、場所、様態の順になることが多い(きのうクラブで楽しく)。また場所や時間を限定する場合は、狭いもの＋広いもの、の順になる。例えば、at the bookstore in Tokyo, at three o'clock yesterdayのようにである。日本語では逆転し、「東京の本屋で」「きのう三時に」のように、広いものから狭いものへと限定していく。だからここでも、英語には開いていく感覚があり、日本語には閉じていく感覚があることになる。

名詞を修飾する形容詞 (句・節) の順番も、日本語では自由だが、英語では決まっている。形容詞の位置は名詞の前であり、the three strange boysとかthese seven happy years of marriageのように、限定詞＋数詞＋形容詞＋名詞という順番になる。また形容詞が複数の場合は、「判断を示す語＋大小・長短・形状＋色」となり、例えばnice long red pencilsのようになる。ただし、形容詞がいつでも名詞の前に置かれるのではなく、複数になると、Today has been a beautiful day, warm and sunnyのように、名詞の後ろに置くこともある。さらに関係代名詞や現在分詞を用いた長い形容詞的語句がつく場合は、名詞の後につなげる。例えば、I remember the strange man who talked to me three days ago as if he knew meのようになる。現在分詞を使えば、the strange man talking to me three days ago...となる。どちらの場合も、長い形容詞的語句が名詞の後ろに続くから、文の前半の骨格部分で話の輪郭をつかみ、後半の肉付けの部分で詳細を知ることになる。日本語の場合、修飾語句はすべて名詞の前に置く。だから先の文は、文法どおりに直訳すれば、「三日前に、まるでわたしを知っているかのように話しかけてきたおかしな人」となり、最後の名詞を聞き取るまで輪郭がつかめない。

同じように、副詞的語句も、主節の後ろにどんどんつ

なげていく。次の例では、二つの分詞構文、一つの副詞節が続いている。

She lay all night, too terrified to sleep, only whimpering a little with fright, when the wind roared fiercely as if attacking the house.

以上のように、英語は発想がきわめて直線的で、文は、主語から出発して、動詞も目的語も副詞も、決められた順番に従って展開していく。それは語句をどんどん追加していく積木型と言っていい。一方、日本語では、最初の方に主語、最後が動詞で、これで「誰がどうした」という枠を作り、その間に副詞などの修飾語句が入るが、並べ方に決まった順番はなく、いわばごちゃ混ぜに置かれる。それは、英語が直線式、積木型なら、円式、あるいは袋型の構図と言ってもいい。これが両言語の基本なイメージである。従って、英語は積木を積むようにどんどん文を伸ばせるが、日本語は、袋にいろいろ詰め込む形になり、あまり詰め込みすぎると袋が破れてしまう一つまり、文が破綻することになる。

ただし、英語の語順はあくまで原則であり、実際には状況に合わせてさまざまに変形される。特に、ある単語に修飾語句がついて長くなる場合には、読みやすさや理解のしやすさから、その語句は後ろに回され、短い副詞等が前へ出てくる。日本人にとってはパズルのような感覚がある。

She read in a newspaper of a woman who had started her own business at the age of fifty and was now very wealthy. (of a woman以下は本来はreadの後)

A boyhood memory came back to me of the time my father had praised me for my bravery. (of the time以下は本来はmemoryの後)

He rejected almost as soon as it entered his head the idea that she hated him. (the idea以下は本来はrejectedの後)

また強調したい語句がある場合は、副詞でも目的語でも、それを文頭に出す。その際、引っ張られるかのように、主語と動詞 (助動詞) の語順がひっくり返ることがある。日本語では動詞が最後を締めくくり、その前に置かれる語句の順番には明確な決まりがないため、ある語句を文頭に持っていても、あまり強調の効果は出せない。

Out he went in anger.

So big was the house that I gave up the idea of living there.

A dreary winter she must have had in her lonesome dwelling.

Sleep I would, were it only for five minutes. (5分でもいいから眠りたかった) (were itはifが省かれたための倒置形。if it were only five minutesと同じ)

聞き手に話の要点を早く伝えるという傾向は、長い文

の際に、文の全体の輪郭を前の方で示す形になって現れる。代表的なのが代名詞itを用い、それを形式主語や形式目的語として使う用法である。

It is important for us to follow him as our leader.
I think it wrong that he did not help her.
It did not occur to me that she might be hurt.

この文の実質的な主語や目的語はtoやthat以下の内容で、itはそれを受ける形式的な役割を果たし、それ自体に意味はない。しかしそのitを使うことで、文の最初に主語+述語という形で言いたいことの輪郭を示すことができる。そしてその後でitで受けた内容がtoやthat以下で具体的に述べられ、肉付けされて、文が完成する。聞き手としては初めの段階で相手の言いたいことの概略が分かるので、文を理解しやすい。日本語には、形式主語のように、文の形を整えるだけの、意味を持たない語というものはないので、まず主語の内容を長々と述べてから、その後に「重要だ」と締めくくることがになり、全体の理解は遅れる。日本語では、「重要なことは、～」とした方が簡潔になる。

itを使った用法では強調構文の場合も同様である。目的語なり副詞なりを本来の位置から切り離して、文頭へ持って行く。それだけでも強調になるが、その語句をさらにit is~thatにはさむことで、さらに強調される。主語を強調する場合は、初めから文頭にあるから、強調構文を使うことになる。

It is this book that I lost ten days ago.
It was after the funeral when the relatives and friends had all gone that she felt her loss most keenly.
It is I who broke the window.

最後の文を直訳すると、「窓ガラスを割ったのはわたしです」となるが、日本語としては、「わたしです、窓ガラスを割ったのは」とした方が強意的だし、英語の本来の趣旨とも合う。

主語が長い場合は倒置形もよく使われる。例えばThe book which I borrowed from him yesterday was very interestingという文の場合、主語が長いから、文の輪郭はすぐには分からない。しかし、順番を逆転させ、Very interesting was the book which I borrowed from him yesterdayとすれば、最初の部分で言いたいことの輪郭が分かり、理解しやすくなる。倒置形は基本的には強調したい語を文の最初に置くのであるが、主語が長く、頭でっかちになる場合もよく倒置形になる。

以上見てきたように、英語では重要な事柄を文の最初の方に示そうとするが、しかし文頭が主語+述語ばかりだとワンパターンで変化がなく、機械的な印象を与える。だから一連の文の流れの中では、変化を出すために、主節の前に副詞(句・節)や接続詞を置くことがよくある。By the way, Frankly speaking, On the contrary, Evidently, And, But, Howeverとか、時の副詞, Now, Then, Last year, One day, In an hour,

At lastなどが文頭に出て、前の文から次の文へとなめらかにつなげていく。

従属節(副詞節)もよく主節の前に出てくる。前に出てくると、その節は強調され、次に何が語られるかと、聞き手の注意を主節に向けさせることになる。次の二つの文を比較してみよう。

Before I go further, I had better glance at what he was supposed to be.
I had better glance at what he was supposed to be, before I go further.
(話を続ける前に、彼がどう思われていたか、少し見ておいた方がよいでしょう)

主節の前に出てきた従属節は強調され、主節へと興味を掻き立てるが、後置された従属節はそれほどインパクトはなく、主節に対する付け足し、あるいは補足という感じになる。これは分詞構文の場合も同じである。主節に先行し、文頭に出るということが、ある効果を生み出すのである。日本語では従属節は主節の前にしか来られないから、この違いは表せない。

英語の兄弟言語であるドイツ語にはおもしろい決まりがある。従属節が主節の前に出てくる場合は、主節の語順が影響を受け、動詞+主語という倒置形になることである。これは主節+従属節という順番が本来の順番であることを示している。英語の場合、形容詞や名詞が文頭に出てくる時、主語と動詞がひっくり返ることがある。しかし従属節のレベルでは、Not until I lost my parents did I realize how deeply I loved themがあるくらいで、ドイツ語のような例は少ない(untilは本来は主節の後に来るのが自然な接続詞)。それだけ英語の従属節は移動の自由があるということであろう。事実、従属節は主節の前や後ろだけでなく、次のように、文中にもはさむことができる。

Father, as if irritated by my presence, turned away without saying a word.

従属節が自由に文頭に置けるといっても、後置が好まれる場合もある。先ほどのuntilのほか、原因や理由、目的、結果などを表す場合である。例えばbecause節は後置が好まれる。I could not attend the meeting, because I had a feverという文を考えると、主節で事実が語られ、従属節でそうなった理由が示されているが、この文で一番言いたいことはその理由の部分である。だから一文で言えば、the reason why I could not attend the meeting is that I had a feverとなり、従属節はその補語の部分に当たる。補語は動詞の後に来て焦点となるものであり、従属節にした場合でも、主節の後に置かれる方が強意的になる(sinceやasも理由や原因を導くが、because(原義はby the cause that)よりも軽く、多くの場合、聞き手と共有された内容になるので、主節の前に置かれ、導入部として、聞き手の意識を主節へと向けさせる。for節も常に後置で理由を表すが、becauseよりは意味が弱く、付け足す感じになる)。また目的を表す従属

節, 例えばHe ran faster so that he might be in time for appointmentも, 上のbecauseと同じような理由で, The purpose of his running faster was to be in time for appointmentのように書き換えることができ, また結果を表す従属節, He ran faster, so that he could be in time for appointmentも, The result of his running faster is that he could be in time for appointmentとなるから, 従属節は後置の方が自然である。

さらに, 重要なものは先にとという原理を逆転させて, 重要な語句を文の最後に置く場合もある。この場合, 前の部分は前置きとなり, 聞き手に興味を持たせて, 話の中へ引き入れる効果を持つ。小説等ではよく使われる方法である。

Lying on the bed was the letter addressed to me.
Far ahead, floating high above the river, were white clouds that looked like cream puffs.
At last there swept over her face a spasm of impatient fury.

また挿入は, 語順とは関係なく, 文中, 文末に自由に語句をさしはさんで, 語調を和らげたり, 間を取ったりする。流れが中断される形になり, 会話だと余計なおしゃべりの部分になるので, なくてもいいものだが, 語り掛けによる親近感を出したり, 間を持たせ, 関心を次に向けさせるといった意味では効果を持つ。

I live in a --I am almost ashamed to say such an affected word--in a palace.
“George” said she, putting her hand in mine, “let us love each other for ever.”
My mother was, I have heard people say, very beautiful.

英語の語順については, ドイツ語との比較が役に立つ。英語はドイツ語と同じゲルマン語派に属し, 古英語においてはかなり似通っていたが, イギリス独自の歴史の中で, 名詞のジェンダー (性別) や格変化がなくなったり, 発音がローマ字読みできなくなったりと大きく変化している。語順も例外ではない。ドイツ語の名詞の格変化は, 日本語の「が・の・に・を」に相当するから, それがあれば語順は柔軟なものになる。しかし英語は, 代名詞にはまだ残っているものの (例えばI-my-me-mine), 一般的な名詞は, 所有格を除き, 格変化を失ったために, 語順が名詞の性質を決める重要なものになった。つまり動詞の前にある名詞が主語, 動詞の後にある名詞が目的語というルールができた。このルールは絶対的であり, これが壊れると, a mouse a cat eatsのように, 主語がどれか分からず, 文は意味を成さなくなってしまう。

ただしドイツ語もIch spiele Tennis (I play tennis) と言うように, 基本的には主語+動詞+目的語である。ドイツ語には語順に関して, 定動詞 (主動詞および助動詞) が必ず2番目の位置に来るというルールがあり, 文頭に主語以外のもの (副詞や目的語) が来ても, 2番目には必ず動詞が来る。英語もある程度その形

をとどめているが, 決定的に違うのは, ドイツ語は従属節では主語+目的語+動詞の形となって, 日本語のように, 動詞は文の最後に置かれるということである。例えば, Ich meine, daß du fleißig bist は, その語順のとおり英語に直せば, I mean, that you diligent areとなる。Er kommt heute nicht, da er krank istは, He comes today not, as he sick isとなる。また主節でも, 助動詞が2番目に来る場合は, 動詞が最後に置かれる (Ich muss heute mit ihr Tennis spielen (I must today with her tennis play))。分離動詞の時も, 定動詞あるいは動詞本体が2番目の位置に来ると, 分離の前つづりは最後に置かれる (Er reist morgen nach Amerika ab (He goes tomorrow to America off))。動詞は前つづりによって意味が変わるので (例えばnehmenは「取る」意だが, abnehmenは「減る」, zunehmenは「増える」の意になる), 日本語のように, 最後まで聞かなければ意味が確定しない。だから助動詞と動詞, あるいは動詞と分離した前つづりで枠を作り, その中にほかの要素を収めることになる。こうした例から, ドイツ語は本来は日本語と同様, 主語+目的語+動詞を基本とする言語だったと推測できる。

実際, ヨーロッパの諸言語の元となるインド・ヨーロッパ祖語は, 主語+目的語+動詞だったと言われている。フランス語, イタリア語の元となるラテン語もそうで, 各語に強い屈折があるため, 語順は自由だったが, 散文では主語+目的語+動詞の形を取り, 修飾語なども動詞の前に置かれ, 動詞が文を締めくくった。サンスクリット語, ヒンディー語など, インド・ヨーロッパ祖語から派生したアジアの諸言語もその語順をとどめたが, それに対し, 英語, ドイツ語, フランス語など, ヨーロッパの言語の多くは, 歴史の流れの中で, 主語+動詞+目的語に変化した。そこには西欧型言語精神のようなものが見出せるかもしれない (ただし中国語は最初から主語+動詞+目的語。中国語はインド・ヨーロッパ語族ではなく, シナ・チベット語族で, 屈折を持たず, 純粋に語順だけで意味を表す)。では, その二つの語順の背後にある発想とはどのようなものであろうか。

主語+目的語+動詞は, 主語と動詞で枠を作り, その中に時間, 場所, 様子などを表す修飾語句を入れる形である。いわば袋型, あるいは, ふろしき型で, 最後に動詞で文を閉じて完結する。これは結論を急がず, 全体の状況をきちんと伝えようとする発想である。一方, 主語+動詞+目的語は, 言いたいことの輪郭を示して土台を作り, そこにいろいろな修飾語句を連ねていく。いわば積木型であり, 土台の上にどんどん語句を重ねていく。これは重要なことを早く簡潔に伝えようとする発想になる。イギリスは, 古英語から中英語の時期を通して, たくさんの民族, 言語, 方言が混ざり合っていた。即ち, 古英語期にはデン人 (古ノルド語) が東部を支配し, 中英語期にはノルマン人 (フランス語) が全土を支配し, またその支配の下で, 英語は統一されず, 地域ごとに独自の方言が話されていた。そういうところでは言葉によるスムーズなコミュニケーションは難しい。しかし互いにコミュニケーションを取る必要から, 言葉と言葉がぶつかり合い, 理解しにくい文法上の複雑な部分が

取れて、単語の意味さえ分かれば、違う言語を話す人でもすぐに分かるような簡潔で合理的なものに変化していく。それはちょうど、多角形の石がぶつかり合うことで角が取れ、単純化されるのに似ている。英語から屈折変

化が消え、語順がそれにとって代わり、発想が直線的になるのは、変化の多い複雑な世界で英語という言語が生き残るための一種の進化だったと言ってもよいであろう。
(続く)